

下落に輪をかける 岸田外交の空疎

政界展望



岸田首相の任命責任が免除されるはずなどない

ジャーナリスト
鈴木哲夫



支持率挽回どころか



山際大臣が辞めたこと自体ではなく、大問題なのは辞め方だ

**岸田政権の危機管理の欠如
チームとしても機能不全を露呈**

「山際（大志郎）大臣が辞めたこと自体ではなく、大問題なのは辞め

方だ。あれだけいい加減な会見や答弁を繰り返してきたのに岸田（文雄）首相はそのまま留任させ、ズルズル行つて、結局は辞める。世間は呆れる。つまり、岸田政権には危機管理能力がないということだ」

自民党ベテラン議員はそう話すが、何をいまさらである。本誌のこの政界展望では、散々危機管理の欠如を指摘してきた。平時ならいい。しかし、いまは有事だ。

新型コロナウイルス、物価高・円安など経済、安倍元首相の銃撃事件、国葬、そして旧統一教会（世界平和統一家庭連合）…。一事が万事だ。どれも同じ危機管理の欠如によって問題をより深刻化させているのである。とにかく岸田首相の旧統一教会に対する一連の対応は酷かった。後手後手の末に急変し、それは同時に随所にブレを露呈した。

信教の自由などの観点を口実に、それまで及び腰だった岸田首相だが、予算委員会直前に豹変した。

旧統一教会に政府として質問権を行使する、つまり調査すると言いつつ出したのだ。

この方針転換について身内の自民党の閣僚経験者ですら疑問を投げかけた。

「岸田首相が急に調査すると言いつつ



出したのは追い込まれての『支持率対策』。急ごしらえ。(予算委の前の)金曜夜から土日で急に根回しをして調整した。自民党は幹事長や副総裁には話はあったのだろうがほとんどの自民党内の人間は知らない。そもそも予算委の当日の月曜日朝に文科大臣を官邸に呼び調査を指示するなどあり得ない。なるほどその直後の予算委で調査すると…。これを見ても帳尻合わせ以外の何物でもない」

また、自民党の国対元幹部はズバリ岸田首相の狙いについてこう話した。

「今後も国会で旧統一教会の追及は続くが、調査に入っていれば、『調査中』とだけ答えれば済むからだ」さらに一貫性のなさは予算委の最中にも出てきた。

岸田首相は解散命令請求の要件として10月18日、「刑法」に関わるもののみと答弁していたにもかかわらず、なんと一夜にして翌19日にはその範囲を「民法」にも広げる答弁をしたのだ。

前出の国対元幹部はとても信じられないと話す。

「18日の答弁は手元に用意された

ペーパーを読んでいた。それを翌日には簡単に変える。ことが法解釈という政府として極めて重いものであるのに一夜にしてというのは安易すぎる。そもそも官僚や側近らと用意したペーパーの精査すら岸田首相はしていないことが露呈した。チームとして成り立っていない」

そして、山際大臣の辞任。

岸田氏にも近い自民党ベテラン議員が経緯を明かす。

「岸田首相は予算委が始まって山際氏を切るつもりはなかった。山際の旧統一教会との関係がある閣僚や副大臣、さらに党三役の萩生田光一政調会長や細田博之衆院議長らに及ぶ。ところが、予算委の山際氏の答弁が酷すぎた。記憶にないとかもう完全にアウト。そこで、もう保たない、切るしかないと判断した岸田首相が4日間の予算委が終わった後に山際氏と会って、辞任を話し合ったようだ。ただ、岸田首相が更迭する形にすると任命責任を負うことになるので、あくまでも首相は守ろうとしたが山際氏が自ら進んで辞表を出したという形にした」

辞表を誰が出したかなど関係ない。任命責任が免除されるはずがないのだが、いかにも永田町的な理屈で、国民には通用しないだろう。ただ今回の辞任を契機に、自民党内からも一気に岸田首相への批判が噴出し始めている。

「切るなら予算委の前だろう。そもそも国会が開かれる前から山際氏は記者会見で旧統一教会との関係は様々な証拠を突き付けられ記者に突っ込まれていた。その回答も『そういう証拠があるなら』そうなのだろう」といった言い訳にもならないようなことを繰り返していた。国会で追及されたらもう持たない、そんな当たり前の危機管理がなぜできないのか」

また、過去の政権で危機管理に深く関わってきた元閣僚もこう漏らす。

「もう少し早く手を打つべきだった。(岸田首相に) そう進言もしたのだが…」

岸田派議員は「調査も始めるし、時間が経てば収まる」と岸田さんは考えていたのではないか。でも世論調査でもずっと批判は続いている中

で、切ることを決断した」と岸田首相を弁護するが空しく聞こえるだけだ。

また、今回の辞任劇では、そもそも岸田首相や官邸と自民党の国会対策(以下国対)との連携ができていくのかという問題もある。

「山際氏について言えば、国対がしっかりと野党の動きなども見ながら『このままでは国会が止まりますよ』などと進言して、官邸と国対で話し合っただけなのが普通。今回、山際氏の処遇などそのまま予算委に入れたということはこうした国対との連携がまったくできていないということを示している。側近だつて、岸田首相に最悪のケースなど耳の痛いことを進言していないのか。岸田政権がちゃんとしたチームになっていないということだ」(前出国対元幹部)

求心力すら失い、岸田批判や岸田おろしといった自民党内政局に発展する可能性もある。2001年に失言などをきっかけに支持率が一桁に



なった森喜朗元首相が退陣した際、辞任の引き金となったのはその年に東京都議会議員選挙を控えていた地方議員たちの動きだった。党大会で鉢巻きをして「このままでは選挙は大敗する」と首相交代を訴えるビラを配った。執行部は森氏の退陣と地方組織の党員投票による総裁選を前倒しした。

来年の春には統一地方選がある。地方の声をナメてはいけない。あの2001年のように、「岸田首相の顔では勝てない」と全国の県連などが声をあげるかもしれない。

支持率を跳ね返せるのか 岸田外交の空疎

一向に回復しない内閣支持率。自ら招いた批判だ。

そんな中で、岸田首相が挽回の一手にしているのが外交だ。

「じつは、首相は就任以来特に外交には強い思いがあった」

岸田首相の側近の1人は言う。

しかし、当然ながら思いがあっても成果は別問題だろう。

この1年間の岸田外交をざっと振

り返る。

首相就任直後の11月に国連気候変動枠組条約締約国会議（COP26）出席でイギリスへ。年明けの3月、インド・カンボジア訪問とG7首脳

会合出席でベルギーへ。

ゴールデンウイーク恒例の外遊は、東南アジアのインドネシア、ベトナム、タイ、そしてそこから欧州へ飛びイタリヤ、バチカン、英国。



私は、最近の総理大臣の中では、最も経済や金融の実態に精通した人間だと自負している

英国では世界最大級の金融街、ロンドンの「シティ」における演説でこう言い切った。

「私は、最近の総理大臣の中では、最も経済や金融の実態に精通した人間だと自負している。インベスト・イン・キシタ（岸田に投資を）」

このほか5月には東京でバイデン米大統領、アルバニージ豪首相、モディ印首相が参加していわゆるクアッドの首脳会合を開催した。ウクライナ情勢などを踏まえ、インド太平洋地域での連携を確認した。

6月はG7サミットとNATO首脳会合出席でドイツ、スペインへ。そして9月には国連総会で演説のためニューヨークへ。

しかし、自民党の外交に精通したベテラン議員はこの1年の岸田外交についてかなり手厳しい。

「たとえばNATOに日本の総理が行くのが初めてだとか、ロンドンのシティで講演するとか、初モノ感や派手さはあっても、成果は果たしてどうか。NATOは軍事同盟で



あつて日本が直接的な関与や影響力がないし、ロンドン講演は市場が反応しなかった。国連改革の演説も世界からの評価は特にない。岸田外交は実よりアピールだ」

岸田首相は、就任直後からとにかく訪米できるよう外務省にはしつつ調整を指示していたという。

「首相就任、外交デビューは最重要同盟関係のアメリカということしか頭になかったようだとにかく年内には実現させろと。このころオミクロン株感染が世界的にも広がりが国際会議も見送られていた。しかし、それだけではない。バイデン大統領は国内経済対策などあつてそれぞれではない、つまり、本当のところは日本の新しい総理に時間を割く必要性などないという対応だった」(外務省OB)

そして、年内の訪米がだめになると、今度は年明けの早い時期に実現できるよう指示がきたという。

「(外務省の)現場も動いたが、バイデン大統領の姿勢は変わらずそうこうしているうちに日本国内でコロナ感染が激増し岸田首相自身の出国どころではなくなった」(同OB)

そこで外務省は、1月22日、オンラインで岸田首相念願のバイデン大統領との初の首脳会談に何とかこぎ着けた。

会談終了後岸田首相は記者団に揚々と語った。

「個人的な信頼関係を確認する上で大変有意義だった」

ただ会談の本身は、想像通りだった。それ以上でもそれ以下でもなく、自民党内からでさえこんな声が聞かれた。

「このタイミングでの日米外交と言うなら、対中国や北朝鮮問題だが何のメッセージもない。それに直前の12月には在日米軍が勝手にPCR検査を止めて入国し基地発でコロナ感染が広がった。なのにひと言注文すらつけない。ただバイデン大統領と首相就任の記念写真を撮りたかっただけだとしか思えない」(自民党外務三役経験者)

たとえば、同じく外交を政権の柱にしたのが安倍元首相だった。

その安倍氏は、自ら公言してきた反中国路線にも関わらず、就任直後の初外遊先は何と中国。周囲を驚かせた。なぜか。

「外交のリアリズムのある駆け引きというのがそういうもの。これによって中国はメンツが保たれ経済協力などには一定の道筋ができたし、逆にアメリカに対しては日本の是非々の存在感を見せつけた。忠犬のようにアメリカに1番に行ってもナメられるだけ」(安倍政権時代の外務省幹部)

奇しくも岸田首相は国会の演説で宏池会伝統の「リアリズム外交」を進めると宣言した。日米を基軸にしながらもしたたかに日本の国益を第一に世界各国と渡り合っていくというものだ。

だが、これには水面下で清濁併せあらゆる強力なパイプや人脈を張り巡らして挑まなければならぬ。安倍元首相はしたたかだった。だが、岸田政権には、そもそもそうした「リアリズム外交」のための絶対条件は備わっているのだろうか。

たとえば岸田首相は外務省との間に強固なパイプや意志疎通が存在し、外務官僚に岸田首相を支えるシンパがいるのか。

何と言っても、岸田氏は安倍政権下で約5年も外相を務めていたのだ

から。

ところが、外相時代の様子についてこんな証言がある。

「岸田首相が外相時代にアメリカ外交をどうするとか、沖縄問題をどうするとか聞いたことはありません。じつは安倍政権の外務大臣は安倍首相自身だったのです。外交は自分という安倍首相と外務官僚が直接話して、方向性やシナリオを決めました。そして台本ができて初めて岸田さんに渡し、岸田さんはその通り振る舞えば良かった。主要な官僚はみんな直接安倍首相に仕え、岸田さんにはつかなかった。外務省内の人脈の薄さはそんな背景があります」(安倍派ベテラン議員)

「岸田さんが外相に就任したので、外務省の中の岸田さんと同じ開成高校出身の官僚が集まって支えて行くという会合を開いた。岸田さんは確かに喜んでいますが、その後定期的にやろうとも言わないし、その縁をどんだん生かして省内にパイプを作ることもしなかった」(自民党外交





安倍政権下では首相と外務官僚が直接話し、台本ができて初めて岸田外務大臣に渡した？

部会議員)

こうした証言から、外相在職中に省内の強固な人脈など「作れるわけがなかった」(前出安倍派ベテラン)ということになる。

外務省内にブレインやシンパがいないその象徴的な最近の出来事が、安倍元首相の国葬だろう。

弔問外交を国葬実施の大義の1つに位置付けた岸田首相だったのだが、別の外務省OBが言う。

「9月27日という国葬儀の日程設定は弔問外交を考えるならあり得ない。この時期は国連総会と重なっていて各国のトップや政府のキーマンはニューヨークで外交を展開する時期で来日する余裕はない。問題なのは、岸田首相や官邸に、その日はダメですよと意見したり情報を入れたりする人間が外務省にいなかっ

たということ。岸田政権と外務省の間の溝が露呈した」

結局国葬への参列はG7の首脳はゼロだった。

岸田首相は自らが外相だったときに大臣秘書官を務めた外務省の中込正志氏を発足時に首相秘書官に任命したが、最近交代させた。外務省とのパイプで齟齬が生じているためなのかは「不明」(前出OB)だという。いずれにしても、岸田外交に上滑り感是否めない。

「台湾をめぐる中国との関係や北朝鮮問題など安全保障を乗り切れるのか。そして来年の広島サミットは核廃絶の世界へのメッセージなどと言っているが一方で日米同盟に縛られて核兵器禁止条約は批准しないなど世界からは『ヒロシマはパフォーマンス』とのレッテルを貼られるかもしれない」(前出安倍政権時代の外務省幹部)

岸田外交の空疎は、支持率挽回どころか下落に輪をかけることになるかもしれない。

(了)

